

〈江口〉の遊女―『撰集抄』の窓から―

石井 倫子

世阿弥自筆能本(江口)では、里人から「コノシヤクタクウワ、イニシエノエグチノキミトテ、ナニキコエタルユウクンノアトノシルシニテ候。コレワカジンニテイラレ候ケルガ、マコトワフゲンボサツノケシンナド、申ツタエテ候」と聞いたワキ僧は、「サテワイニシエノエグチノキミノアトナリケリ」と合点しており、二人の間には「イニシエノ江口ノ君」について共通の理解が成立している。

江口の遊女といえは、

十六の君は遊女夜発の長者、江口河尻の好色なり……昼は簪を荷つて身を上下の倫に任せ、夜は絛を叩ひて心を往還の客に懸く。

(藤原明衡著『新猿楽記』原漢文)

江口は即ち観音を祖となし、中君・□□・小馬・白女・主殿あり……雲客風人、遊女を賞でるがため、京洛より河陽に到るの時は、江口の人を愛す。

(大江匡房『遊女記』原漢文)

など早くからその名が見えるが、これらはいわば代名詞としての「江口の遊女」にすぎず、

西行との贈答歌によってはじめて、「歌人ニテイラレ候ケル」ひとりの遊女の姿が生生きと浮かび上がることになったといつてよい。

周知の通り、〈江口〉は①西行と江口の遊女妙との和歌の贈答、②遊女が性空の眼前で普賢菩薩と変じる性空普賢得説話を素材としている。世阿弥自筆能本(江口)で②の性空普賢得説話を用いて後シテを「カブノボサツ」から「フゲンボサツ」に改めていることに関しては、田口和夫氏「世阿弥自筆能本(江口)から―『古事談』系説話との出会い―」(『能楽タ イムズ』393号 1984.12)、落合博志氏「江口の構想と成立―形成の問題を中心に―」(『能 研究と評論』13号 1987.3)、松岡心平氏「江口」のキリについて」(『鏡仙』354号 1987.12)などで論じられているので詳細はそれに譲りたいが、①②をともに収める『撰集抄』は道心堅固な江口の遊女に深い思い入れがあったらしく、当該説話に多くの紙幅を費やすばかりか巻五でも尼になった江口の遊女と西行とのやりとりを描いている。

此遊女の云やう、「いとけなかりしよ

り、かゝる遊女となり侍りて、とし比そ
のふるまひをし侍れども……げにさきの
世の宿習のほど、思ひ知られ侍りて、う
たてしく侍りしが、この二三年は此心
いと深くなり侍りし上、としたけ侍りぬれば、
ふつにそのわざをもをし侍らぬに侍り
……しかしあれば、夕べには、こよひす
ぎなばいかにもならんと思ひ、あかつき
には、此夜あけなばさまをかえて思ひを
とらんと侍れども、年へて思ひなれに
し世の中とて、雪山の鳥のこゝちして、
いままでつれなくてやみぬる悲しさよ」
とて、しやくりもあへず泣くめり。

(巻九一八「江口遊女歌之事」)

右の遊女の述懐は、〈江口〉の「サシ」の
シカルニワレラタマノウケガタキニ
ジンヲウケタリトイエドモ、ザイゴウフ
カキミトウマレ、□□ニタメシクナキ
カワタケノナガレノ女トナル、サキノヨ
ノムクイマデ、ヲモイヤルコソカナシケ
レ

という眩ぎとオーバラップする。当初は「いと哀にはかなき物かな」と憐憫の情をもって江口の遊女の姿を眺めていた西行であったが、

……かりの宿をも惜しむ君かなといふ腰折を、我よまぎらましまし。しからば、なぞてりをかさぐらましまし。しからば、なぞてかゝるいみじき人にもあひ侍るべき。このきみ故に、我もいさゝかの心を、須臾

ほどおこし侍りぬれば、無常菩提の種も、いさゝか、なか兆さざるべきとうれしく侍り……かの遊女の最期のありさま、いかゞ侍るべきと、かへすくゆかしく侍り。

と、和歌の贈答をきっかけに言葉を交わした江口の君の深い道心に心動かされ、我が心にもまた無常菩提の種が芽生えぬはずがないとの確信を得る。いわば江口の君との出会いを通じて西行は大悟するのであって、ここには「かかる罪深き身になれるも、さるべき報ひに侍るべし。此の世は夢にてやみなむとす。必ず救い給ひなん」と少将聖と結縁した『発心集』の室の遊女のような、僧との結縁による救済を望む「受け身型」とは異なる双方通行の関係が成立しているのである。

僧と積極的に言葉を交わし、自らの芸を披露しながら徐々に僧を悟りへと導き、最終的に普賢菩薩本来の姿を現す（江口）のシテは、性空の眼前に忽然と普賢菩薩の姿を示して法を説き、性空に正体を見あらわされた後に俄に死んでしまった普賢感得説話の遊女の姿よりはやはり、西行と交流を持つ『撰集抄』の江口の君のイメージにより寄り添った造形というべきで、一宿の宿を拒む真意を測りかねた西行に「うち笑ひて」、「仮のやどに心とむなと思ふばかりぞ」と種明かしする『撰集抄』の江口の君と、そんな江口の君を「アルジノ心ナカリケレバ」と表層的にししか理解しない

ワキを論ず前シテという構図も、見事なまでの相似形をなしている。

しかし、〈江口〉の江口の君は『撰集抄』の枠内には収まりきらない。「ヨシ／＼ナニカトイタマウトモ、イワジヤキカジ、ムツカシヤ」とワキの発言を遮って船遊びを始めるシテの姿は、卒塔婆問答でワキをやりこめる（卒都婆小町）のシテと重なるのみならず、結縁の供物を受け取らぬ性空に「津の国のなにはのことか法ならぬ遊びたはぶれまでとこそきけ」（『後拾遺集』釈教・1198）と詠んだ遊女宮木や、天王寺の別当大僧正行尊の舟に推参して「見苦しくや」と船頭に制され「有漏路より無漏路にかよふ釈迦だにも、羅喉羅が母はありとこそきけ」という今様を謡って反論した江口の遊女（『伝法絵』）を思い起こさせるし、月の夜に舟遊びする遊女達の姿は、『梁塵秘抄口伝集』にいう「船に乗りて波の上に泛かび、流れに棹をさし、着物を飾り、色を好みて、人の愛念を好み、歌を謡ふ遊女の姿や『六百番歌合』恋十「寄遊女恋」の「蘆間分け月にうたひて漕ぐ舟に心ぞまづは乗りうつりぬる」（1141・家房）の光景さながら。【序ノ舞】後の「ワカ」は「実相無漏の……」と性空への普賢菩薩の説法をほぼそのままの形で引くが、これも「有漏の此の身を捨て棄てて、無漏の身にこそならむずれ 阿弥陀仏の誓ひあれば、弥陀に近づきぬるぞかし」（『梁塵秘抄』巻二・法文歌）のような遊女の芸と

考えるべきで、「法文の歌、聖教の文に離れたる事無し」（『梁塵秘抄口伝集』）を具現化するかのごとく、遊女から普賢菩薩への変身の序奏として機能している。

このように、『撰集抄』の江口の君をベースにさまざまな遊女のイメージを織り込みつつ、〈江口〉は莊嚴なクライマックスへと向かっていく。小峯和明氏は『撰集抄』の西行と遊女の説話について、「往生を契機に結縁はかろうとする救済への指向」や「遊女の往生を語り、哀惜し同化のまなざしで迎え取ることで、語り手や読者の往生希求をも保証し充足させる」という構造を指摘している（『水辺と街道の遊女』『立教大学日本学研究所年報』4号 2003）。〈江口〉の改訂は「平面的な芸能羅列の傾向もあつた遊舞的印象の作品から明確な基調・主題を持った作品への変化（或はその完成）を伴うもの」（落合氏前掲稿）であつたが、江口の君と言葉を交わし、彼女が普賢菩薩に変わって白象に乗り西の空へと姿を消すまでの一部始終を見届けることによつて、〈江口〉のワキも、そしてまた観客も救済を約束されたといえるだろう。宗教劇としての〈江口〉はここに完成したのであつた。（日本女子大学准教授）